



をかした二人

12月26日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

12月26日のおはなし「をかしな二人」

それは二人組の老人だった。

新橋で地下鉄を降りて、階段を上がって地上に出たところで彼らを見た。青い制服を着て、きびきびと立ち回り、駐車中の自動車に何かはりついたり、その模様を写真に撮ったりしているので、駐車禁止車輛を取り締まっているのだとわかった。てきぱきてきぱき。無駄のない動きで、彼らは職務を遂行していた。でも何かがひっかかった。民間に委託された駐車監視員。ありふれた光景だ。ありふれた光景のはずだ。

なのに何かが違う。

何だろう？ ぼくは何にひっかかっているのだろうか？ 横を通り過ぎながら何気なくぼくは二人の顔を見る。しわ深い、日に焼けた老人の顔。何も思いつかない。

午前中の打ち合わせを終えて、軽い昼食をとろうと近所のコーヒーショップに入って再び彼らを見た。このエリアを担当しているのだろうか。二人とも同じ物を——ホットドッグとアイスコーヒーを頼んだらしく、特に話すでもなくそれらを口に運んでいた。一人がホットドッグを手に取り、もう一人がアイスコーヒーを混ぜる。アイスコーヒーを混ぜた方がグラスを持ち上げると、ホットドッグがぱくぱくと二口食べる。ホットドッグを皿に置くあたりまでにアイスコーヒーはグラスを持ち上げストローで二口ほど飲み、次の瞬間、二人はホットドッグとアイスコーヒーを同時に机の上に置く。すると役割が交代して一人がホットドッグを手に取り、もう一人がコーヒーを混ぜる。

あれっ？ と思ったが、その時もまだ何だかはよくわからなかった。なぜ「あれっ？」と思ったかは、その夜になってわかった。仕事を終え、いい店があるからと同僚に誘われて飲みに行ったバーで、またしても——なんとこの日三度目——彼らを見たのだ。それは『カルテット』という名の、銀座に古くからあるバーで、足下にはピスタチオの殻がびっしり敷き詰められている。その店ではカウンターで飲むか、立ち飲み用の小さなテーブルで飲むしかない。ぼくは初めて入る店だったのできょろきょろしていると、カウンターの右端で何かパフォーマンスをやっているのに気づいて目を止めた。

こちらに背を向けた小柄な男が二人、ものすごく正確な振り付けで何かをやっている。ぼくはすぐにそれが店のBGMに合わせてダンスを踊っているのだとわかった。一人が軽く左を向くともう一人が微妙なズレで左を向き、跳ね返るように右を向くとこれを受けてもう一人も右を向く。そのまま二人同時に右手を伸ばし、何かをつまみ上げ、口に放り込む。全身を使ってそれをかむ様子を示す。正確に同じ回数、上体を軽くひねるように揺すったかと思うと、ひょいと肩越しに何かを投げる。ピスタチオの殻だ。

ああすごい。息がぴたりと合っている。その時曲が終わる。でも二人の動きは止まらない。グラスを口に運び、微妙にずらしてとんとんと置き、カウンターに左手の指をぱららっとうちつけ、足がスツールの足置きをカン！と蹴る。音楽だ。二人の回りには音楽が流れ続けているのだ。カウンターの中の年老いたバーテンダーがゆっくりレコードプレイヤーに近づき、ターンテーブルのレコードを裏返す。老バーテンダーはちらりと右端の二人に目をやり、間合いを計ったように針を落とす。二人のダンスに合わせるように音楽が流れ出す。

ぼくは呆然としてしまった。何だ？ 何なんだ？ 同僚はそんなことには全く気もとめず会社がいよいよ危ないんじゃないかなんて話をしている。適当に相づちをうちながら、ぼくの目はもうカウンターの三人に釘付けである。そう。二人ではない。三人だ。よく見るとバーテンダーの動きもカウンターの二人と見事に同調しているのである。ダスターでカウンターを拭き、シェイカーとグラスを並べ、くるりと背を向けると棚からボトルをひょひょいと手に取り、カウンターにタン！と置く。その波が伝わったようにカウンターの二人のグラスがススッと持ち上がる。一糸乱れぬチームワークだ。

やがて二人はグラスの酒を飲み終わると同時に（完璧に正確に同時に）立ち上がり、バーテンダーと握手し、店から出て行こうとした。その時初めてぼくはそれが駐車監視員の二人組の老人だということに気がついた。しかも彼らは我々のテーブルに目を向けるとこっちに近づいてきた！

「よう来てたのか」一人が言い、「忘れたのかと思ったよ」もう一人が完璧な間合いで続ける。するとぼくと同僚が「相変わらずみごとな飲みっぷりですね」と言った。気づいていたのか！「たいしたことはない」がりがりにやせた方が言うと、「たった一杯さ」少々おなかの出た方が続ける。

「しかもビールなし」

「そうビールなし」

「恋しいだろう」

「ああ恋しい」

「ホップの香りが」

「せつないねえ」

冗談ぽく口々に言いながら、二人組の老人はひらひらと幻想の中の炎のように手を振ると、にやっと笑って店を出て行った。

「知り合い？ 何者なんだ？」意気込んでぼくが尋ねると同僚は、びっくりしたようにぼくを見た。「なんだ知らなかったのか。すごい昔の芸人さんで、リズムコントってのをやっていたんだ」「芸人さん」「そう戦争直前くらいが全盛期だったらしい」「なんて言う人たち？」「ビール腹の方がホップさん、それでやせている方があんまりお尻が小さいってんでヒップさん」「二人合わせてヒップホップ？」

「いやいや。それなら面白いんだろうがね」近づいて来た老バーテンダーが言う。テーブルの空いたグラスを片付け、頼んだカクテルをテーブルに置きながら。「わたしもメンバーの一人でね」

「じゃあトリオだったんですか？」

「トリオじゃない。この子の亡くなったおばあさんもメンバーでね」この子といわれて手を上げたのは同僚だった。「『カルテット』というのがわたしらの名前だったんですよ」

（「ヒップホップ」 ordered by Dr.T-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

をかしな二人

<http://p.booklog.jp/book/41351>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41351>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41351>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.